

有田川町内における学校循環型授業研究の推進

研究代表者：宮橋小百合

共同研究者：有田川町立藤並小学校 校長 川岸俊夫

教頭 安井健晃 教諭 九鬼正志

有田川町立小川小学校 校長 古川弘樹

教諭 服部真子

有田川町立鳥屋城小学校 校長 川口久仁

教諭 寺中誠

はじめに

2019年から、有田川町立藤並小学校、小川小学校、鳥屋城小学校の3校と連携し、著者らの進めている「インストラクショナル・ラウンズ（以下、IR）」の手法を用いた授業研究を行ってきた（廣瀬ら，2019）。具体的には、有田川町内の3つの小学校で研究授業を順に実施し、それぞれの学校に互いに訪問して研究授業に参加することによって、町全体を見通した学校間連携を促進し、現職教育の活性化や若手教員の育成を目的としている。その関係から今年度も協力を快諾いただいた。

1. 調査実施日と調査協力者

調査実施日は、表1の通りである。

表1 調査実施日

日にち	研究授業実施校
11月10日	藤並小学校
11月13日	小川小学校
11月17日	鳥屋城小学校

各校の調査（研究授業）には、別の2校から教諭が1名ずつ参加して参観・分析を

行った。分析の手法は、上述の通りIRの手法を用いて行った。また、手法の特徴上、参観・分析する人数が複数名必要となるため、和歌山大学教職大学院の現職院生数名を中心に協力を依頼した。

IRの手法では、以下のような手順で研究授業を実施している。①授業を提供する学校（以下、ホスト校）は2つの授業を公開する、②ホスト校から1名、他の2校から1名ずつ、大学院生（現職教員）の数名がチームとなり（以下、IRチーム）、参観前にホスト校の校内研究のテーマや研究の進捗状況について説明を受ける、③IRチームは2手に分かれ、2つの授業を交互に・部分的に参観する、④参観時には教師・子ども・学習内容の3つの視点で記録を取る、⑤IRチームは記録をもとに、ホスト校の研究テーマに関わる授業の部分を抜き出し、付箋に書きだす、⑥付箋に書きだされた内容をもとに、2つの授業に共通するパターンを見出す（この工程を「分析」と呼ぶ）、⑦見出されたパターンをもとに、ホスト校の課題と今後の展望についてチームで考察する（この工程を「展望」と呼ぶ）。

今年、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大に伴い、授業参観時に教室に外部者が大勢入ることを避けるため、直接参観はせず、ビデオ撮影した授業の様子を見て記録を取るという手順に変更した（表2）。

表2 調査（研究授業）日の流れ

	研究協力者	第一著者
10:30		機材の搬入
4時間目		授業の撮影
13:15	実施校に集合	
13:30 (5時間目)	ビデオ視聴（記録）	
15:00	記録の分析	ファシリテート
16:00	分析結果の報告	

教師の動きと子どもの反応を視聴できるように、提供された2つの授業は、教室の前後からビデオで撮影した。分配器を用いて、モニターには2画面で教室の前後の映像が写せるように努めたが、初の試みだったため機材の調整がうまくいかなかった回

もあった。

2. 藤並小学校での調査（研究授業）実施

藤並小学校をホスト校とする研究授業では、3年生の国語の授業と、5年生の算数の授業の2つが提供された。ビデオによる視聴後、分析を行った結果は表3の通りである。課題と考えられるパターンは2つ見出された。

ホスト校のIRチームのメンバーである九鬼教諭は、表3のパターン②を「課題」として入れるか否かについて、逡巡する様子が見られた。ホスト校の研究主任であり、児童らのこれまでの成長や歩みを知っている九鬼教諭にとって、パターン②が発見された授業場面は、「成果」であって「課題」ではないのではないかと考えているようであった。その後、ホスト校に勤務した経験もある寺中教諭の助言で、今後もっと授業が良くなるために目指す方向性としての「課題」として②を展望シートに入れることになった。

表3 藤並小学校での分析の結果（展望シート）

課題と考えられるパターン	課題が発見された授業場面
①単元のねらい（指導者）を踏まえた本時のめあて設定 ②子ども同士の発言のつながりをより多くする	①3年生：「なぜ順番について考えるのか？」 5年生：「なぜ比べるのか？」 ②3年生：「似ていて～！」でつながる発表 5年生：ペア・グループでの発表
課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言	
（短期的） ①単元計画の中の本時の位置づけを教師も子どもも明確にする ②相手意識を持った聴く・話す	（長期的） ①領域における系統性を意識して計画・指導する ②他の子と共有したくなる活動（共有の必然性がある活動）



図1 藤並小学校でのビデオによる参観の様子

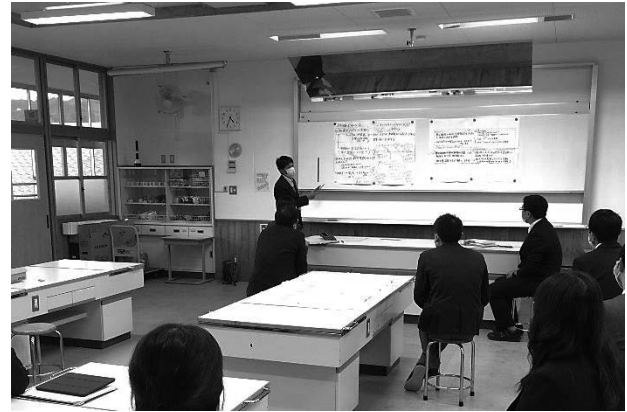


図2 藤並小学校での分析結果の報告

IR実施後に、授業者2名へアンケート調査を行った。その結果、分析された「課題と思われるパターン」について、2人とも「日ごろの授業実践でも感じる課題でしたか？」という問いに、「非常に当てはまる」と回答している。そこでは「子どもに『なぜそのめあてが設定されて、なんのためにそれに向かっていくのか』を明確に示していかなくはないと改めて気づかされました」という気づきについての記述回答が得られた。また、「普段の授業からペアやグループを活用して意見の交流をするよう指導していますが、全体の場合での発表から全体の場合で意見をつなぐ場面をもっと作っていくべ

きだと感じました」という回答も得られた。

3. 小川小学校での調査（研究授業）実施

小川小学校をホスト校とする研究授業では、3年生の国語の授業と、5年生の算数の授業の2つが提供された。ビデオによる視聴後、分析を行った結果は表4の通りである。課題と考えられるパターンは2つ見出されたが、提言は短期的と長期的で1つずつにまとめられた。

分析では、ホスト校の研究のキーワードになっている「焦点化・視覚化・共有化」という3つに関わって、2つの授業について協議された。

表4 小川小学校での分析の結果（展望シート）

課題と考えられるパターン	課題が発見された授業場面
①子どもの思考を限定してしまう	①3年生：「そんなに難しく考えなくていいよ」 5年生：「あなたたちは円でやってね」
②全体で考えを伝え合う場面の設定	②3年生：工夫を読み取る場面 5年生：「A!」「そろえる！」
課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言	
(短期的) 個人思考のときの支援のあり方 (子ども・場面に応じて)+ゆさぶり・立ち止まる場面	(長期的) 単元構成のあり方(つけたい力に応じた発問)



図3 小川小学校でのビデオによる参観の様子

2つの授業では、「焦点化」しようという教師の意図は読み取れたが、それがパターン①の課題につながっていたのではないかという話し合いがなされた。また、「共有化」につなげるためには、パターン②の課題を認識して授業を構成していくのがよいのではないかという協議がなされた。

IR実施後に行った授業者2名へアンケート調査の結果、分析された「課題と思われるパターン」について、2人とも「日ごろの授業実践でも感じる課題でしたか？」という問いに、「非常に当てはまる」と回答している。回答には、「子どもにすぐにヒントを与え、考える時間が取れていないとご指摘を頂きました。つい時間内に終わらせようと考える時間を普段から取れていなかったと



図4 小川小学校での分析の様子

思います」や、「子どもに答えを言わそうとしすぎて、発言を限定してしまう場面が多かったことを振り返れました」という記述が見られ、分析結果をもとに普段の授業について省察を促すことができたことがわかった。

4. 鳥屋城小学校での調査（研究授業）実施

鳥屋城小学校をホスト校とする研究授業では、3年生の国語の授業と、5年生の算数の授業の2つが提供された。ビデオによる視聴後、分析を行った結果は表5の通りである。課題と考えられるパターンは1つ見出され、提言は短期的と長期的で1つずつにまとめられた。

表5 鳥屋城小学校での分析の結果（展望シート）

課題と考えられるパターン	課題が発見された授業場面
発問の精選	3年生：子どものつぶやき⇔応答 5年生：「逆に1円あたりは何枚か？」(11:39頃)
課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言	
(短期的) 教師の言葉を整理する	(長期的) 教師主導から子どもと共につくる授業



図 5 鳥屋城小学校での付箋からパターンを見出そうと協議している様子



図 6 鳥屋城小学校での分析結果の報告

ホスト校の今年度の研究の方向性として示された、「習熟の時間を確保する」、「学習の見通しを持たせる」、「段階を踏んだノート指導」といったポイントと、重点事項である「子どもが自分なりの考えを作り、発信していくこと」というポイントを押さえながら、授業の中でそれらがどのように現れていたのかについて IR チームで協議された。その中で、「習熟」を意図するあまり、教師が発問を繰り返して確認している場面が、2つの授業に共通する課題として見出された。また、「子どもが自分なりの考えを作り、発信していくこと」という重点ポイントから、授業の終末に行われる「まとめ」を子どもたちの言葉でできるように、子どもに聞いてやるような授業づくりをしていってはどうかという話し合いが行われ、長期的な提言の「教師主導から子どもと共につくる授業」として整理された。このホスト校では、IR チームが分析した内容について報告した後、授業者2名と校長、IR チームに入ってくれた寺中教諭とで、付箋が貼られた模造紙の前で分析結果について長い時間話し合う様子が見られた。

IR 実施後に行った授業者2名へアンケート調査の結果、分析された「課題と思われるパターン」について、2人とも「日ごろの授

業実践でも感じる課題でしたか？」という問いに、「非常に当てはまる」と回答している。また、「言葉にこだわり、児童にもう少しワークをさせるように工夫をしていきたいと思った」という回答が得られたことから、分析結果や提言の内容が授業者に受けとめられていることがわかった。また、「『短期的』『長期的』と分けていただいたことで、何を取り組むべきなのか優先事項が明確に見られてよかった」という記述が見られ、授業改善への見通しをある程度提供できたと考えられる。

5. おわりに

今回の調査では、ビデオ視聴による参観になったこと等、前年とは異なる点が多かったため単純に比較はできないが、3校のうち2校の研究主任が IR チームに入ったこと、加えて2校の研究主任が互いの学校に勤務経験があったため、児童の実態について互いに理解があり、ホスト校の研究動向や児童の実態を踏まえた分析をより行うことができたと考える。

また、3校での調査（研究授業）を実施した後、IR チームのメンバーにもアンケート調査を行った。3校から参加した調査協力者の回答の一部は表6の通りである。

IR チームのメンバーの回答からも、「日頃の自分」、「普段の授業」と授業者としての自分を振り返る機会となったことがわかった。また、IR という手法の特性である「客観的に」授業を観察し、分析する点が、「自分や子どもの様子をより正確に捉えられる」と考えていることがわかった。さらに、「他校の先生方と一緒に授業分析をすることで授業を見る視点を増やす」ことができたという回答があり、複数名で協議することの意義を実感しているようであった。しかし、これは IR の手法の特徴とは言えず、他の研究授業の手法との差異とは言い難い。

この調査では、学期末に IR チームのメンバーに再度聞き取り調査を実施する予定である。そこでは、その後授業づくりや研究主

任としてどのように調査結果を生かしたのかについて聞き取り、本研究の目的である現職教育の活性化や若手教員の育成について検討していく。

引用文献

廣瀬真琴・森久佳・宮橋小百合 (2019) Instructional Rounds の日本における試行と評価, 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 第 70 巻, 249-261 頁.

【注】

本研究は、科学研究費助成事業基盤研究 (C)「学校間連携型授業研究ハンドブックの開発」(18K02338) 及び基盤研究 (C)「学校を超えて学び合う現職教育の組織化に関する研究」(20K02856) の一環として実施した調査の一部である。

表 6 IR 実施後のアンケートの一部

	藤並小	小川小	鳥屋城小
Q6 学びにつながったポイント	4 分析 (整理・分析) 6 展望	1 観察するポイント 5 子どもの立場になって考えて推測 (解釈) 6 展望	2 どのように書き記すか 4 分析 (整理・分析) 5 子どもの立場になって考えて推測 (解釈) 6 展望
Q7 どのようなことが学べたか。明日からどのように生かせるか。	教師の言葉をたくさん拾ったことで、日頃の自分もたくさん喋っていて、無理なことを言ったり、余計なことを言っているんだろうと考えさせられました。また、他校の先生方と一緒に授業分析をすることで授業を見る視点を増やすことにつながり、研究主任として活動していくヒントを得られた気がします。	普段の授業で、まだまだ意識できていないことが多くあり、今回の IR を通して、改善・意識しなければならぬことがわかりました。少しずつでも、できることから取り組んでいきたいと思います。	客観的に授業を振り返ることで、自分や子どもの様子をより正確に捉えられるため、こういう機会を作ることも大切だと思いました。